

# 農業のカタチ

## 集落での取り組みは

### 『地域のため』は『個人のため』

徳丸生産組合

代表 渡部 伸さん

農業後継者の不足、遊休農地の増加など、厳しい状況にある農業。こうした中、注目を集めているのが「集落営農」という考え方です。「集落営農」とは、「集落」を単位として、農業生産過程における一部又は全部についての共同化・統一化に関する合意の下に実施される営農のことです。平成18年「徳丸集落営農組織」を設立した、代表の渡部さんを訪ねました。

## 集落営農に至った経緯

徳丸地区は、兼業農家が多く、近年は高齢化が進み、遊休農地が

増えてきました。

そうした中、昭和59年に徳丸集落の55戸のレタス栽培農家が、機械の共同利用や作業の受託を目的とした「徳丸営農複合生産組合」を設立。その後、平成2年に集落の全農家（当時108戸）が加入して組織の再編を行い、平成18年には現在の形である『徳丸生産組合』が発足しました。

## 必ず地元に戻ってくるように

現在は、麦の播種・収穫、水田の耕起・水稲の収穫を主に請け負っている徳丸生産組合。その活動内容とは。

「作業野帳をつけ、工程表を作って作業の効率化を図り、賃金を下げ、日当を歩合制にすることにより、受託料金をギリギリに設定して利用しやすくしています。組織を存続させていくには、収入を安定させないといけませんからね。また、発注する人自身がオペレーターとなることを要件とし、出したお金は必ず地元に戻ってくるようにしています」  
何もかも順調に進んできた徳丸生産組合ですが、将来義務付けられている集落生産法人化にむけ、不安もあるといいます。



## 法人化にむけての不安

「大きく2つあります。1つは人材です。組織を存続させるためには、企画・実行できる経営者が必ず必要です。しかもその人材がスポットでいたわけではダメで、続いなければいけません。もう1つは、法人として田んぼを預かることができるようになり、地域でより大きな責任を背負うことになっていきます。現在は作業受託だけですけど、今後は依頼があれば田んぼを預かることになるでしょうね。管理できるか心配です」と話す渡部さん。しかし、もちろん考

えがあります。

「足りない収益を別のことで補えないかと考えています。自分たちの米は自分たちで売ったり、集落外で農作業をしたり……」と地域のため、個人のため持続可能な農業の保全策を探っていました。

## 農業をつなぐについで

「昔は、結婚が20歳ごろで、25歳ぐらいに子どもができる。そうすると、自分が55歳で定年になって農業を引き継いだとしたら、80歳になってちょっと農業がしんどくなってきたころ、ちょうど自分の子どもが55歳で定年をむかえる。だから農業がつながってたんなんです。だけど今は定年が65歳でしょう？ そうなると10年の空白ができてしまふんです。時代が変わってしまつたために、農業がなくなつたんです。だから我々生産組合でその空白をカバーしてるんですよ。つまりは、こうして組織で農業をするのも、地域のためであり自分のためなんです」  
地域に守られ、地域を守る農業。きつとこれからもずっとつながっていくでしょう。